

お さつ か  
押し作家はクラスメイト!?(2)

はな わた しら き  
花綿あま／作 白木しろ／絵



講談社 青い鳥文庫

この  
ファンレターの  
差出人って

Ayana先生へ 

咲川  
だろ？

わたし、咲川小花  
のクラスには

女子たちに  
めちやくちや人気で

だけど  
「関わったら最後  
泣かした女は数知れず！」

とっつわさされる  
学校一のイケメン男子



あやせ  
さな  
綾瀬佐那が  
いる

……ふあ

ファンレターフマ  
なんの話……？

ハハ……

とりあえず  
取りつくろう

ぜったいに  
わたしが差出人  
だってうなずく  
わけにはいかない

だってだって  
そのファンレターって……

大人気恋愛小説  
「きみに甘い牙を」の作者  
Ayana先生に出した



わたしのありったけの  
愛をつづった  
手紙なんだもん!!

だけど  
どうしてそれを  
綾瀬くんが持つてるの!?



わ  
た  
ま  
ん

……おまえ

この手紙を書いた  
『ふにゃ猫』だろ?



これ

忘れたの?  
見ていっす!

おまえの  
教科書にも  
描いてあった

……この猫

びゅん

あ。

わたしの中学デビューが  
ぶち壊されるわけには  
いかない!!

ヒタイイ

わたしは

引っ越しを期に  
見た目を改造して

みんなから  
頼られる存在に  
なるためクラス委員長に  
立候補した



はい!!

小学校まで

教室のすみっこで  
本と向き合うような  
いわゆる地味女子だった

このうのに

だったら何!!



悪い!?

つまいうか

どうしてその手紙を  
綾瀬くんが  
持つてるの!?

どうして……





ゴッソ



どうしてわたしが  
1年前に  
Ayana先生に出した  
ファンレターを……



!!

だって



おれが

Ayanaだから

まさか  
あこがれの  
作家先生が  
男の子で  
しかも  
クラスメイト  
だなんて……!?

恋愛テーマの作品には  
どういうシーンが  
読み手の心に刺さるのか

咲川の  
ファンレターを元に  
勉強したんだよ

だからさ

わたしの……?

え……

咲川に折り入って  
頼みがある



おれの陰の  
編集者として

協力して  
くれないか



……そんな……

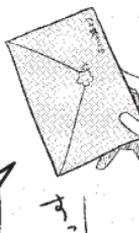
いやいやいや  
わたしには無理だよ!!



じゃあ



咲川が一生懸命に  
隠してたオタク趣味



みんなに  
バラしても  
いいんだな?



うぐ

夢みたいな話

それは  
いくらなんでも  
ヒドいよお!!

大ファンだったら  
困ってるおれに  
手を差し伸べて  
くれていいだろ

あつていいので  
しょうか……?



# もくじ

おもな登場人物  
とうじょうじんぶつ

1 きみと夢の中で××!?  
きみとゆめなか

2 ときめきハッピーデート!

3 どきどき職場体験スタート!  
しよくばたいけん

4 みんなでわくわく、ポップ作り!  
みんなどわくわく、ぽっぷづく

5 新たなイケメン作家、登場!?  
あらたないけめんさかとうじょう

.....  
12

.....  
14

.....  
37

.....  
52

.....  
67

.....  
85



10

あとがき

.....  
172

9

夢<sup>ゆめ</sup>を見るなら、きみとふたりで

.....  
165

8

特別<sup>とくべつ</sup>なきみへ

.....  
152

7

きみの心<sup>こころ</sup>の中心<sup>ちゅうしん</sup>は

.....  
142

6

信じ<sup>しん</sup>じたい気持<sup>きもち</sup>ち

.....  
126

バチバチトライアングル!?

.....  
98

おもな  
とうじょうじんぶつ  
登場人物



さきかわこはな  
咲川小花

ちゅう  
中1。  
れんあいしやうせつ かアヤナ だい  
恋愛小説家Ayanaの大ファン。  
がっこう がいんちよう  
学校ではクラス委員長として  
ふんとうちゆう あやせ  
奮闘中! 綾瀬にたのまれ、  
かげ へんしやうしや  
「陰の編集者」に!?

あやせさな  
綾瀬佐那

こはな  
小花のクラスメイト。  
がっこういち だんし  
クールで学校一のモテ男子。  
れんあいしやうせつ かアヤナ  
じつは、恋愛小説家Ayana。



くろ さき みやび  
黒崎 雅

こう こう せい れん あいしやう せつ か  
高校生で恋愛小説家の  
いちみや みつ アヤナ  
一宮 百。Ayanaを  
い しき  
意識している。



る り はら まい か  
瑠璃原舞香

こ はな  
小花のクラスメイト。  
あや せ す  
綾瀬のことが好きで、  
め ちやく ちやく せつ ぶく でき  
めちゃくちゃ積極的。

い が ら し ぞう  
五十嵐空

こ はな  
小花のクラスメイト。  
よう  
陽キャでクラスの  
ムードメーカー的存在。  
てき せん ざい  
綾瀬と仲がいい。





# きみと夢の中で××!?



「おれ、咲川さきかわに言いつておきたいことがあるんだ。」

すらりとしたスタイルに、さらさらの黒髪くろかみ。切れ長ながだけど大きな目めにすつきりとした高い鼻はな。だれが見みても整ととのった顔かおをしている綾瀬あやせ佐那さなは、うちの学校がっこうを代表だいひょうするイケメンの生徒せいだ。

「ただどその実じつ、女子じよしは苦手にがてで、モテモテなのにあんまり周囲しゅういの女子じよしに近ちかづくことをしない。」

「……はずの彼かれに、わたし、咲川さきかわ小花こはなは、なぜか壁かべドンドンをされている。」

「ど、どうしたの？ 綾瀬あやせくん、急きゆうにあらたまつて……。」

「どきどきしながら、彼かれを見み上げる。初夏しょかの空そらが、夕焼ゆうやけ色いろにそまる中なか。」

目が合うと、やけに真剣な表情をした綾瀬くんが、わたしの髪をさらりと耳にかけてきた。な、何このモテ男ムーブ！ 本当に綾瀬くんなの!?

「おれ、咲川にいままでずっと陰の編集者として支えてもらってた。すごく助けになつてるし、感謝してるんだ。だけどいまのままの関係じゃ、その、物足りなくて……。」

「も、物足りないって……。」

「いったい、何がどう物足りないって言うの……!?

「咲川には、もつと近くから、おれを見ていてほしい。どきどきと、胸の高鳴りが止まらない。」

「も、もつと近くって、それって、つまり……。」

「だって、おれにとつて、咲川は……。」

そつと、綾瀬くんの手のひらがわたしの肩をつかむ。

「えっ、あ、綾瀬くん……?」

そしてそのまま、わたしに向かつて角度をつけて顔を近づけてくる綾瀬くん。

そ、そんな、ちよつと待つて、綾瀬くん!

か、顔が近い！ 近すぎるから——！

ゴンツ！ と頭が何かにぶつかった衝撃を受ける。

うつすらとまぶたを開けると、そこには綾瀬くん……ではなく、ピピピピツ、と鳴り続ける目覚まし時計が床に転がっていた。

目に映る部屋は、すべて逆さま。世界が反転している。

ゆ、ゆめ……？ 夢だったの、いまの……？

なんだ、夢か。ああ、よかった。それなら二度寝でもして……。

じゃない！

がばっ！ と、ベッドからすべり落ちていた身体を起こす。

「……っ！」

わたしつてば、なんて夢を見ていたんだろう！

だって、もしも目を覚まさなかつたら、あのまま、綾瀬くんときつ……。

うわあつ！ とはずかしさで、近くに落ちていたまくらに顔をうずめる。

それもこれも、綾瀬くんからわたしてもらった『恋をするなら、きみとふたりで。』を  
読んだせいだ。

ちなみに綾瀬くんこと、綾瀬佐那くんは、現役中学生にして超売れっ子小説家の Aya  
na 先生で、わたしのクラスメイトだ。

そんな彼の大ファンであるわたしは、ひよんなことから、ひみつの編集者として彼のお  
手伝いをしている。

その中でつい先日、読ませてもらった綾瀬くんの新作小説である『恋をするなら、きみ  
とふたりで。』の内容が、とにかくすごかった。

だってあの小説の内容、ひみつをかかえた小説家と編集者の恋のお話だったんだもん。  
まるで、綾瀬くんとわたしみたいなの……。

そんな物語を書いて、なおかつ、綾瀬くんはわたしに原稿をわたすとき、「おれの気持  
ちが、つまってる物語だから。」って言ったんだ。

それってつまり……そういうこと、だよな？

でも言葉にされていないから、確信が持てない。

綾瀬くんは、いったいどういう意図があつて、あの小説をわたしにわたしてくれたんだらう？

答えがわからないまま、ここ最近ずっと悶々と考えている。

そのせいで、いまではときどき、おかしな夢を見るようになってしまった。

はあ、とためいきをついて、ごろりと床の上で大の字になると、再び目覚まし時計がピピピッと鳴った。

「もう、うるさいな。起きてるつて……ば、つて、うわ、やばい！ 遅刻する！」  
わたしは急いで飛び起きた。



お肌OK。髪OK。制服OK。

手鏡と自分が反射した窓を見ながら、身だしなみを完璧に整える。

そして、ふうつと息をはいてから、教室のドアを開けた。

「みんな、おはよう。」

「あ、咲川さん。おはよー。」

「委員長、おはよう。」

ふだんどおりのさわやか笑顔で挨拶をすれば、クラスの人たちがいつもどおりに返してくれた。

その姿を見て、ほっとする。

少女漫画とか恋愛小説が趣味だった、教室で公言したときはどうなることかと思っただけ……。

案外、すんなりと受け入れてくれた。むしろ自分の好きなものについて、いろいろと話しかけてくれる子も増えて、結果オーライだったように思う。

「ほら、来たよ。咲川さん……。」とか、「綾瀬くんはいっしょじゃないんだ。」なんて、瑠璃原さんたちのグループからは、まだまだ陰口をたたかれてるけど。

それでも、勇気を出して、自分の好きを言えてよかったって思う。

これからも少しずつ、自分に素直になれたらいいな……。

「咲川。」

背中側から、声をかけられて、どきつとする。

こ、この声は！

「あつ、お、おはよう。綾瀬くん。」

「ん、おはよ。」

ねむいのか、いつもよりやわらかく挨拶を返してくれる綾瀬くん。

……もしかして、夜遅くまで原稿を書いたのかな？

「綾瀬くん、ちよつと。」

手招きをして、綾瀬くんにそばによるようにうなぐす。

「何？」

「すつごくねむそうだけど、遅くまで書いてたの？」

小声で言えば、綾瀬くんは「あー……わかる？」と同じく小さな声で告げた。

「あんまりむりしたらだめだよ。ねむくて、ふらふらになっても知らないよ？」

「わかってるって。でも、あれだな。」

「何？」

「学校に来るまで、けっこう、頭回ってなかったんだけど……。」

綾瀬くんがわたしの顔をのぞきこむと、にっと笑った。

「咲川の顔見たら、ちよつとねむけさめたかも。」

不意打ちのほほえみ。

「ずきゅん！ と射ぬかれた気分になって、わたしはよろりと後退した。」

「咲川？ どうし……。」

「な、なな、なんでもない！」

わたしの反応を見て、不思議そうな顔をしている綾瀬くん。

ああ、どうしよう。夢のせいで、やたら綾瀬くんがキラキラして見えるよ！

ドギマギしていると「よお、佐那！ 今日もだるそうだな！」と綾瀬くんのお友だち、

五十嵐空くんが、肩を組むようになりながら綾瀬くんに声をかけてきた。

いきなり肩を組まれたからか、綾瀬くんはその姿をめんどくさそうに見た。

「おいおい、そんなふうにならむなよ。あ、咲川。おはよ。」

「お、おはよう、五十嵐くん。」

さわやかに挨拶をする五十嵐くんは、朝からとつても元氣だ。

わけへだてなくみんなと仲がいいので、交友関係がとつても広い。いわば陽キャだ。

そんな彼のとなりからは「おはよう。佐那。咲川さんも。」と、もうひとりの綾瀬くんのお友だち、九条叶くんが声をかけてくる。

そのクールな王子様って感じの容姿から、先生や生徒ともに人気が高い。

意外な組み合わせだけど、綾瀬くんたち三人は仲がいいらしい。

綾瀬くんに苦手意識があつたころは、一匹狼かな？ って勝手に決めつけていたけど、どうやら違つたみたい。

「空、重いし、耳元でうるさい。」

「あ、ひどいやつ。おまえがねむそうだから、起こしてやろうと思つてだなー。」

「まあ、たしかに。空の声はうるさいよね。」

「おまえまで言うか、叶！」

三人の仲良しな会話を聞きながら、きがねない友だち同士つていいなつて思う。

「まーじでふたりしてひどいよな。咲川もそう思うだろ？」



と、五十嵐くんが言え、

「いや、咲川さんも思うでしょ？ うるさいなつて。」

そう、九条くんが返す。

五十嵐くんと九条くんとは最近、よく話すようになった。

というのも、この前、綾瀬くんがわたしをかばって助けてくれたとき、学校ではちよつとしたうわさになつたんだ。

綾瀬くんとわたしが、そういう、いい感じの関係なんじゃないかつて。

綾瀬くんは（主に女の子の）人氣がすごいから、事態を収束させるのは大変だった。

そして、そのとき手伝つてくれたのが、五十嵐くんと九条くんだ。

ふたりはその交友関係の広さをいかして、うわさを否定して回つてくれたんだ。

おかげで、さわぎは素早く落ち着いて、ほとんど元どおりになった。

「おまえら、ふたりして咲川を巻きこむなよ。」

まったく、と綾瀬くんが彼らとわたしの間に口をはさんだとき、ちやうど担任の飯塚先生が、「ほら、席につけー。」と教室に入ってきた。

それを見ながら、「じゃあ、またあとでな。」「またね。」というふたり。

横目で綾瀬くんを見ると、「悪いな、さわがしくて。」「と申し訳なきそうに告げた。

「ううん、気にしないで。むしろにぎやかで楽しいよ。」「

わたしだつてふたりには頭が上がないんだから。

首を振るわたしに、「よかつた。悪いやつらじゃないからさ。」「と付け足す綾瀬くん。

その目が優しく、五十嵐くんたちのこと、友だちとして大切なんだろうなと思つた。

そんな顔をしてもらえるふたりが、ちよつとうらやましいかも。

「じゃあ、咲川。またあとで。」「

「う、うん。」「

綾瀬くんは自分の席にもどつていく。

そんな何気ない姿だつて、キラキラして見える……だなんて。

わたしの目、本当にどうかしちやつたみたい。

ぶんぶん顔と顔を振つて、わたしも自分の席にもどる。

でも、綾瀬くん。またあとで。だつて。

図書室の整理も終わり、収束したとはいえあんな騒動もあつて。

表立って話す機会がへつていたわたしたちだけど、いまなら仲良く話していても冷やかされない。

その理由は――。

「来週の職場体験にそなえて、各班は集まって、スケジュールの最終確認をしておくように。……じゃあここからは、各班の班長がそれぞれ仕切ってくれ。」

飯塚先生の言葉を皮切りに、クラスみんなが席から立ち上がる。

わたしも立ち上がって、大きな声でこう呼びかけた。

「出版社での職場体験組は、こつちに集まってください！」

そして、こちらに向かつて歩いてくるのは……。

「もう来週から。なんか、実感わかないな。」

頭の後ろに手を回す五十嵐くんと、「そうだな。」とうなずく綾瀬くん。

ふたりが（特に綾瀬くんが）同じ班に来てくれるってだけで楽しみ度が上がる。

じつはわたしたち、職場体験でいっしょに出版社に行くことになったんだ。

それも、編集者のリアル体験！

小説家つてことをみんなにかくしている綾瀬くんは、初めは、九条くんが手をあげてた違う職場体験を希望して、極力本と近しい職業はさげようとしていたんだけど……。  
五十嵐くんが「出版社？ えーいいじゃん！ 楽しそう！ 佐那も行こうぜ。」って強引に綾瀬くんを引っ張ってきたのだ。

大丈夫かな……？ と心配になったけど、元々出版社に興味があったわたし的には、とつてもうれしい行き先だ。

だって、こうして堂々と綾瀬くんといつしよにいられる口実もできるし、好きなことを学べる。だから、一石二鳥だ！ 職場体験最高！ つて。

最初こそは心おどらせていたんだけど……。

「咲川さん、何、ぼーっとしてるのよ？」

「あ！ ごめん、瑠璃原さん。」

まさか、瑠璃原舞香と同じ班になるだなんて！

「さっさとつくえを動かさなさいよ。班を作るんでしょ？」

「う、うん。」

瑠璃原さんとは、この前の騒動以来、正直まともに話をしていなかった。

それなのに、職場体験の希望先が重なって、同じ班になってしまっなんて……。

どうしよう！　と思つたものの、瑠璃原さんはこれまでと変わらない態度でわたしに接してきた。それに、班のための行動なら素直にしたがってくれているから、いまのところこれといった実害はない……けど。

「じゃあ、佐那くんのとなりは舞香ね。」

つくえを移動したあと、ちゃっかり綾瀬くんのとなりを死守する瑠璃原さん。

距離も近くて、なっ！　と固まってしまふ。

そんなわたしを「咲川？　どうした？」って不思議そうに見る五十嵐くん。

正直、綾瀬くんをとられてばかりなのは否めない。

職場体験は楽しみだけど、来週から本当に前途多難だよ！

そんな不安をいだきながら、当日の流れの最終確認が終わり、先生に決定したスケジュールを伝えるに行く。

そして、ゆううつな気分きぶんで班はんにもどろうと歩いていたら、綾瀬あやせくんが瑠璃原るりはらさんからは死角しかくになつているところで、こつそり紙かみをわたしてきた。

わたしはとなりを通りすぎるふりをしながら紙かみを受け取とつて、五十嵐いがらしくんのとなりにする。  
わる。

「伝えに行いつてくれてサンキュー、咲川さきかわ。」

笑顔えがおでお礼れいを言う五十嵐いがらしくん「ううん、班長はんちやうだから。」と答こたえつつ、ひぎの上うへでそつと紙かみの中なかをのぞいた。

『放課後ほうかご 屋上おくじやうで』

急いそいで書かいたような文字もじに、どきつとする。

思おもわず綾瀬あやせくんに目めを向むけたけど、彼かれはすました顔かおでべつのところを見みていた。

だれにもバレわらないように、ささつと書かいたのかな？

くすつと笑わらいそうになつたけど、がまんする。

放課後ほうかごが楽たのしみだ！

じつは、図書室の改装工事が始まってからは、綾瀬くんと小説の話ができる場所をさがすことに苦戦していた。

体育館や音楽室は部活動生が使っているし、他の空き教室だって、いきなり生徒が入ってくる可能性がある。

だからだれにも見つからないような場所って悩んでいたとき。  
屋上はどうだろう？　つてひらめいた。

もちろん、ほとんどは施錠されているんだけど、水曜日と金曜日だけは開いていて、そのことに気づいている生徒はあんまりいない。

わたしはたまたま屋上の施錠を担当している先生に話を聞いたから知っているだけだ。  
そして、今日は金曜日！

放課後になり、るるるんで屋上に向かう。

夏本番はまだ先だけど、日差しも普通に強くて、屋上のとびらを開けるだけでふわりと生暖かい風が足元をふきぬけていった。

綾瀬くん、いるかな……？

放課後、クラス委員長としての雑用を終えたあと、すぐに屋上にやってきた。  
あんまり待たせたつもりはないけど、帰っていたらどうしよう。

「綾瀬くん？ い……。」

いる？ と言おうとして、つい口をつぐむ。

だって、本をひぎの上で開いたまま、すやすやねむっている綾瀬くんがそこにはいたから。

やっぱり、待たせちゃったかな？

極力起こさないようにして、近くにすわりこむ。

いつもはつくえにつつぷしているから、ちゃんと見たことはなかったけど。

綾瀬くんって、寝顔はちよつとあどけないんだな……。

ふだんは大人びて見えるのに、これもギャップってやつだ。

小説のネタとして、今度伝えよう！

それにしても。

「まつげ、長いなあ……。」

肌はきれいだし、鼻は高いし、くちびるの形だつていい。

これだけ顔が いいのにスタイルまでよくて、おまけに優しい。

そのうえ、超人氣作家だなんて……。

もしも綾瀬くんが顔出しなんてしたら、大変なことになるに違いない。

「きつと、もつとモテちゃうんだろうなあ……。」

自分で言つてて、ずうんと落ちこんでしまう。

これ以上、ライバルが増えるのはかんべんなんですけど……。

そう思いながらいま一度、綾瀬くんの寝顔を見る。

なんとなく、ほおのやわらかさが気になつて、思わず指でつこうとしたら。

「見すぎ。」

手をつかまれた。

「ひえ、綾瀬くん!? お、起きてたの? いつから!？」

「咲川がここに来たあたりから。」

つてことは……それつて。



「うそでしょ、初めから!」

「おれって、まつげ長い?」

「なっ!」

「モテそう?」

「ひ、ひどい! からかわないでよ!」

はずかしくてほおをてのひらでおさえながら怒ると、「ごめんごめん。」と、綾瀬くんは楽しそうにあやまった。

ひみつの編集者をたのまれる前までは想像もつかなかった、綾瀬くんのそんな楽しそうな顔。……わたし、ちゃんと仲良くなれてるかな?

なれてる……よね。だって今日見た夢でも、わたし、綾瀬くんと……。

「つて、違う! あれは夢だから!」

「さ、咲川? どうした?」

おどろいたような綾瀬くんの顔を見て、はっとした。

「う、ううん! なんでもない! それで、なんだっけ? 今日はどうしたの?」

笑顔えがおでそう返かえせば、心配しんぱいそうにこちらを見みながらも「ああ。」と綾瀬あやせくんはうなずいた。  
「週末しゅうまつ、ちよつと取材しゆざいをかねて行いつてみたいカフェがあるんだけど、咲川さきかわもいつしよに来きてくれないかなつて。」

「えつ……。それつて……。」

もしかして、もしかしなくとも、デートの……。

「編集者へんしゆしやとして、なんだけど。」

「あ……うん。そうだよね。」

わかつてました。デートのお誘さそいなわけがないじゃない。

「だめか？」

「ううん。もちろん、大丈夫だいじようぶだよ！」

笑顔えがおで答こたえるけど、ちよつと残念ざんねん。

いや、わかつてはいたけど。

やつぱり、意識いしきしてるのはわたしだけか……。

はあ、両想りやうおもいの道みちのりつて、けわしいんだなあ。

心こころの中なかで泣なきべそをかいていると。

「よかった。咲川さきかわといっしょならいいアイデアが浮うかぶからさ。」

なんて、天然てんねんたらしの綾瀬あやせくんがうれしそうに言う。

それだけで、キュンっとしてしまう自分じぶんがくやしかった。

綾瀬あやせくんが『女泣おんななかせ』ってうわさ、あながち間違まちがいじゃなかったかも。

「楽たのしみだな。」

「……そうだね。」

そう笑顔えがおでうなずきつつも、心こころの中なかでは、とほほ、と涙なみだが止とまらなかった。

2

## ときめきハッピーデート！



「髪型、変じやないかな？」

手鏡で前髪を確認する。

そして、ふとお店の窓に映った姿を確認して、身だしなみの最終チェックした。  
綾瀬さんと週末のおでかけなんて、遊園地以来だ。

今日はちよつと大人っぽい自分をイメージしておしゃれしてみた。

だって、綾瀬さんにどきつとさせられてばっかりなんだもん。

少しはわたしも意識させたいし……。

とはいえ、ちよつとシックにしすぎたかな？

このレースのワンピース、もしかして地味？

日の下で見ると、わからなくなってくる。

あのときよりもますます綾瀬くんへの気持ちが大きくなっているから、どきどきと緊張が増して、何が正解か不正解かわからないや。

はあ、だれかを好きになるって本当に大変だな。

「咲川？」

そこには、私服姿の綾瀬くんが立っていた。黒のカットソーと少しダボつとしたジーンズ。

シンプルなのに超おしやれに見えちゃう綾瀬くんは、やっぱり制服とは違う良さがある。思わず見入っていると、「聞こえてる？」と首をかしげられた。

「あ、ごめん。いま来たの？ 早かったんだね。」

「咲川こそ。早いな、まだ五分前なのに。」

「は、早く準備が終わったから。」

やばい、急に緊張してきた。そわそわしながら、髪の毛を耳にかけていると、綾瀬くんが「そう。」と言いなながら、わたしの全身をじっと見つめてきた。

な、なんだろう。

「綾瀬くん？ わたし……何か変？」

「え？ あ、いや、ワンピースなんだと思つて。」

さらつと口がすべつてしまったのか。綾瀬くんは、「あ。」と口をつぐんだ。

「ご、ごめん。だめだった？」

カフェだからそんなに動かないかなつて思つて、ワンピースにしたんだけど……。

「いや、だめつていうか……。」

綾瀬くんは動揺をかくすように、顔をそらした。

「そうだ。おれの行きたい店、ならぶんだよ。早く行かないと。」

綾瀬くん……？

すたすたと歩いていく綾瀬くん。わたしはあわてて、その後を追つた。

その耳が、なんとなく赤い気がするけど気のせいかな。

綾瀬くんについていくと、童話に出てきそうなかわいらしいカフェへたどりついた。

パステルカラーの雲や、かわいい羊のぬいぐるみでおしゃれにかざられた外観に、

ぎよつとする。ファ、ファンシーだ……。

「こ、ここ？」

ずらつとならんでいるのは女の子たちばかり。

「ああ。今度『アマキバ』でスイーツ好きなライブル吸血鬼を出そうと思ってるんだけど、そいつがアイを連れていった店のイメージにぴったりかなって。ただひとりじゃ来づらくて。」

『アマキバ』とは、Ayanase先生こと綾瀬くんが書いている『きみに甘い牙を』という小説のシリーズだ。

「なるほど……。」

これはたしかに、来づらいかも。

行列にならぶと、わあ、と色めき立つ女の子たちの視線が綾瀬くんにつきさささつていた。

「なにあの男の子。」

「超かつこいい！」

と黄色い声が飛ぶ。

あ、しまった！ だってただでさえ、ひとりだけ男子で目立ってるのに。

その見た目が芸能人顔負けって……。

「咲川……？」

綾瀬くんには、サングラスでもかけさせておけばよかつたかも！

いや、でも逆に目立つちゃうか……。と悩んでいると、あつという間に時間がたち、

「次でお待ちのお客さま〜！」とわたしたちが呼ばれた。

キラキラのラメがついた白のレースをかけたテーブルにつく。し、しかも横ならびの！

「なんか、中は思ったよりも統一感あるんだな。」

肩なんていまにもふれ合いそうなのに、綾瀬くんはいつもどおりだ。

挙げ句の果てに「ちよつと写真撮る。」って、写真まで撮り始めちゃって……。

いや、仕事で来てるからいいんだけど！

「今日は付き合ってもらったお礼におごるから、咲川も好きなの選んで食べて。」

「あ、うん。」

資料を増やすことに夢中で、綾瀬くんは、ぼしやぼしやとスマホで写真を撮っていた。そうだ。せつかくなら、少しでも参考になるようなメニューをたのもうかな？

「あの、すみません。」

「お待ちせいたしました。ご注文ですか？」

「はい。あの、このお店で一番人気のスイーツとか、何かおすすめってありますか？」

「一番人気でしたら、こちらののもくもくドリンクです。それから、こちらのキラキラフルツパフェも期間限定のメニューになってるのでおすすめですよ。」

「綾瀬くんはどうする？」

「おれは……この、もくもくドリンクにしようかな。」

「じゃあ、わたしはキラキラフルツパフェにしようかな。あ、こっちのえんとつティラミスもおいしそう。……この三つをお願いできますか？」

メニュー表を指さすと、店員さんは「かしこまりました。」と笑顔で去っていく。

それからしばらくしてパフェとケーキとドリンクがテーブルに届くと、「あ、こういうスイーツの写真がちょうどほしかったんだ。」と綾瀬くんはうれしそうに写真を撮っている。

た。

食<sup>た</sup>べるだけだとせっかく誘<sup>さそ</sup>ってもらったかいがないから、ちよつとは力<sup>ちから</sup>になれたらなつて思<sup>おも</sup>つてたのんでみたけど……。

よろこんでくれたならよかつた。

ほつとしながら、「いただきます。」とパフエを食<sup>た</sup>べようとしたところで、女<sup>おんな</sup>の子<sup>こ</sup>たちの視線<sup>しせん</sup>を痛<sup>いた</sup>いほど感<sup>かん</sup>じた。

大口<sup>おおぐち</sup>を開<sup>あ</sup>けていたわたしは、思<sup>おも</sup>わずかちんと固<sup>かた</sup>まる。

『何<sup>なに</sup>。あ<sup>おんな</sup>の女<sup>こ</sup>の子<sup>こ</sup>……。彼<sup>かのじよ</sup>女<sup>よ</sup>？』とか。『だとしたら、あんなに豪<sup>ごう</sup>快<sup>かい</sup>に食<sup>た</sup>べようとしないでしょ。あんな、カッコいい彼<sup>かれ</sup>氏<sup>し</sup>の前<sup>まえ</sup>で。信<sup>しん</sup>じられない。』とか、きつと言<sup>い</sup>われている。

どうしよう、一<sup>いっ</sup>気<sup>き</sup>にはずかしいかも。

「……すご。この雲<sup>くも</sup>、綿<sup>わた</sup>あめでできてるのか。シロップでとかす、と。へえ。もくもくドリンクつて名<sup>な</sup>前<sup>まえ</sup>だけあつて、ふわふわしてるな。」

綾<sup>あやせ</sup>瀬<sup>せ</sup>くんは資<sup>し</sup>料<sup>りょう</sup>集<sup>あつ</sup>めに夢<sup>む</sup>中<sup>ちゆう</sup>で、まったく気<sup>き</sup>づいてないみたい。

いやでも、周<sup>まわ</sup>りなんて気<sup>き</sup>にしたつてしかたない。

目の前のパフェやケーキに罪はないし、おいしく食べてもらったほうがいいに決まってる！

うん、何も考えない。考えないぞ……。と思いつつながら、ぱくりと食べた色とりどりのフルーツパフェは、とつてもおいしかった。

「ん〜！ 甘い！」

あまりのおいしきにもだえていると、ふと横から視線を感じた。

「あ、綾瀬くん？ どうしたの？」

いつの間にか、写真じゃなくてわたしのことを見ている綾瀬くんにどきつとする。

首をかしげるわたしに、綾瀬くんが自分の口のはしをとんとんと指先でたたくので、

「どうしたの？」とたずねれば。

「だから、ここ。」

「え……。つ！」

綾瀬くんの親指で口のはしをぬぐわれた。

「ついでに。クリーム。」



「っ！」

心臓しんぞうが口くちから飛び出とそうになる。ぼんつと、顔かおが一気いっきに熱あつくなった。キヤ、キヤパオーバーだ。脳のうの処理しゆりが追おいつかない！

「ん？ どうした。」

とか言う綾瀬あやせくんに、どうした、じゃない！ と言いい返かえしたかった。

いきなりそんなことを、しかもさらつと自然しぜんにするのは反則はんそくだよ！

「な、なんでもない！ 早く食たべちやおう！」

ほてる顔かおをかくすようにしてパフェをほおばっていると、綾瀬あやせくんがふと、「しまった、もうこんな時間じかんか。」とつぶやいた。

「どうかしたの？」

「いやじつは、他ほかにも行いきたいカフェがあつて予約よやくしてるんだけど……。」

「うん？」

「あと三十分ぶんでここを出でないと間まに合あわなないかもしれない。」

「……えっ!? あと三十分ぶん!？」

ってことは、残り三十分以内で、これを食べ終わらないといけないうってこと!?

「悪い。早く言えばよかったな。」

「えつ、う、うん!」

返事をしながら、大急ぎでパフェとケーキを完食する。

「……よし! 食べ終わった。次に行こう!」

ちよつとハードだけど、綾瀬くんの取材のためなら……!

っと思つてたんだけど……。

「……咲川。大丈夫か?」

「うん。へ、平気……。」

綾瀬くんの力になりたくて、どちらのお店でも頑張つて、いろんなスイーツを平らげたせいで胃が気持ち悪かった。

「悪い、むりさせたな。」

「ち、違うんだよ! わたしが綾瀬くんの力になりたくて……ただ、ちよつと気持ちに胃

がついていかなかったというか……。」

えへへ、とおおをかくわたしを綾瀬くんは申し訳なきそうに見つめて、「少し休んできよう。」とわたしを近くのベンチにすわるようにうながした。

綾瀬くんがいろいろと気づかってくれたおかげで、だいぶ体調がもどってきたころ「綾瀬くん、他にも行きたいカフェはある？」とたずねた。

「え？ いや、もうカフェはないけど……最後に書店には行きたいかな。」

「書店！ わたしも行きたいかも、新刊とか見たいから。」

笑顔で答えると、綾瀬くんは少し目を丸くしたあと「よかった。」とほっとしたように続けた。

「それなら、あと少し休んだら行くか。」

「え？ べつにもう平気だよ。」

「おれが平気じゃないから。だから、咲川も付き合つて。」

と言う綾瀬くん。

そのほほえみがあまりに反則で、どきつと心臓がはねた。

あ、綾瀬くん！ さっきのスイーツよりも、その顔は、甘すぎるよ！

急な胸キュン攻撃を受けて心臓が爆発寸前になりつつ、ふたりでならんでベンチで休んだあと、わたしたちは書店へ向かった。

「じつはさ、気になってる本があるんだよ。」

「そうなの？ なんて本？」

「『アマキバ』と似たジャンルで。……あ、これだ。」

「それ、知ってる！ 『きみキラ』だ！」

大人気恋愛小説家・一宮百先生の書く『きみとキラチューン』は中高生を中心にとつても流行っている小説だ。

キラキラアイドルと住みこみ作曲家のひとつ屋根の下、逆ハー展開ありの王道恋愛小説で、ときどき感動もあつて泣けるって話題になってるんだよね。とにかく一度読みだしたら止まらない大人気作品だ。

「綾瀬くんも知ってるんだね。いいよね、『きみキラ』！ わたしも好きだよ！ 新刊出てるなら買おうかな。」

綾瀬くんの持つている『きみキラ』を見ながら悩んでいると、綾瀬くんはすつとそれを平積みにもどした。

「あれ、買わないの？」

「いや……いい。どんなふう到店頭にならんでるか、見に来ただけだし。」

心なしか少しむっとした様子ようすの綾瀬くん。え、どうしたんだろう……。

「綾瀬くん、怒ってる？」

「……べつに。だけど、ただ。」

「ただ？」

「とられた気分きぶんっていうか。咲川はおれのファンなのに。」

「……………」

「……何なに、笑わらってんだよ。」

「いや、だって……。ふふつ。」

それって嫉妬しつとしたことだよね？

「心配しんぱいしなくても大丈夫だいじょうぶだよ。わたしが一番好きなのはAya-na先生せんせいの本だから！」

笑顔で伝えるわたしに、「あつそう。」とそっぽを向いたけど、綾瀬くんははずかしそうだった。

どうしよう、綾瀬くんのちよつとかわいい一面が見られてうれしいかも。  
さつきまでの気持ち悪さも、いまので完全にふきとんで、幸せな気分だ！  
今日でまた一歩、綾瀬くんに近づけたよね？